

入選

テーマ3…多様性を認め合う社会をめざして
「さくら咲け」

茨城県・江戸川学園取手高等学校1年 志村翠優

「俺も一緒に遊んでいい？」

それが、彼が私たちにかけた初めての言葉でした。

私たちの小学校には「さくら学級」と呼ばれる特別支援学級があります。そこに自分の感情をコントロールするのが苦手な特性を持つ男の子がいました。彼は私たちと同級生でしたが、うまくいかないことがあると暴れて、他の男子に暴言を吐くことがありました。そのため、男子からは嫌われ、女の子からは恐れられていました。私もその一人で、彼が暴れているときは他の子と目を見合わせて「怖いね」と言い合っていました。そして彼が怒って教室を飛び出すと、どこか安心している自分がありました。これで授業の続きが受けられる、と。さらに彼は、私たちより言語の発達が遅れていて、話しかけてくれても何を言っているのか理解できない事がありました。結果的に無視をしてしまうこともあり、それが彼を怒らせる原因になってしまったのかもしれませんが。そんな日々が続いたので、私たちは誰も彼とまともに話したことがありませんでした。三年生になる年、彼はさくら学級に移ることになりました。新学期のクラス名簿に彼の名前がなかったことに少し寂しさを感じると同時に、正直ホッとしたのを覚えています。そしてそのまま私たちは彼のことを気に留めず学校生活を過ごして行きました。

しかし、五年生の夏、ある事件が起こります。

それは昼休み、私たちが長縄で遊んでいたときでした。突然、その男の子がやってきて、私たちの輪に加わったのです。驚いたものの、何もされなかったのでもそのまま遊び続けました。彼の番が来た時、彼は引っかかって転んでしまいました。その途端彼は烈火の如く怒り、暴れ出しました。私たちの間に緊張が走りしました。冷静な男の子が先生を呼びに

行き、彼はさくら学級に戻って行きました。私たちのクラスの空気は最悪でした。私を含め誰もが彼を疎ましく感じてしまった瞬間でした。ですがその事件も時間が経つにつれ、次第に忘れられて行きました。

そして、卒業式を間近に控えた三月、最後の思い出に、みんなで校庭で遊ぼうと外に出た時、私たちは下駄箱で呼び止められました。

「俺も一緒に遊んでいい？」

そう言ったのはかつて同じクラスだった彼でした。私たちは啞然としました。初めての彼の言葉がはつきりと伝わったからです。ですが、私たちは即答できませんでした。五年生の時の事が頭をよぎったからです。私たちが答えあぐねていると、彼はそれに気付いたのか、黙って下を向きました。また暴れ出すのかなと身構えた瞬間、「ごめん」といい、走り去ろうとしました。それを止めたのはあの時誰よりも冷静だった男の子でした。「いいよ！」その時の彼の顔が忘れられません。申し訳なさそうでもあり、心の底から嬉しそうでもありました。その日、私たちは一緒に遊びました。何をしたかは覚えていません。ただ、かけがえのない時間でした。後になって私は、彼を受け入れた子に聞きました。

「どうして、いいよって言ったの？」

答えは拍子抜けするほどシンプルでした。

「入れて欲しいと言っていたから」

私は驚いて思わず聞き返しました。

「そんなに単純でいいの？」

その時の、彼の不思議そうな表情と優しい声色が今も鮮明に残っています。

「だってあいつ、友達じゃん」

私たちは自分とは違う特性を持つ子を素直に受け入れる事ができません。だから、多様性を認め合おうと必死になります。でも、そうやって『努力して受け入れよう』としている時点で何か間違っているのではないのでしょうか。『分かり合いたい』ではなく、『わかる事が当たり前』。私たちが生きる世界は、

「友達だから」

この一言で十分なのかもしれません。